

2023年1月22日 みあとの祭りカレンダーをつくろう

人とつながる祭りの学習

1. 第3学年 総合的な学習の時間「みあとの祭りカレンダーをつくろう」(3時間)
2. 単元の目標 「祭りを通して、人とつながる」
 - 地域の祭りを調べる過程で、インタビューをする方法を知り、地域の文化、地域の人、自分とのつながりを知る事ができる。 (知識・技能)
 - 自分の生活と文化の継承とのつながりの中で問いを見出し、課題を立て、情報を収集・分析して表現することができる。 (思考・判断・表現)
 - 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、地域の伝統文化に関心を持ち、意欲的に考えようとしている。 (主体的に学習に取り組む態度)
3. 資質・能力の育成につながるESD

本単元はESD(持続可能な社会に向けた教育)であるが、総合的な学習の時間の学習である。総合的な学習の時間の第1の目標は以下のとおりである。

● 第1 目標

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

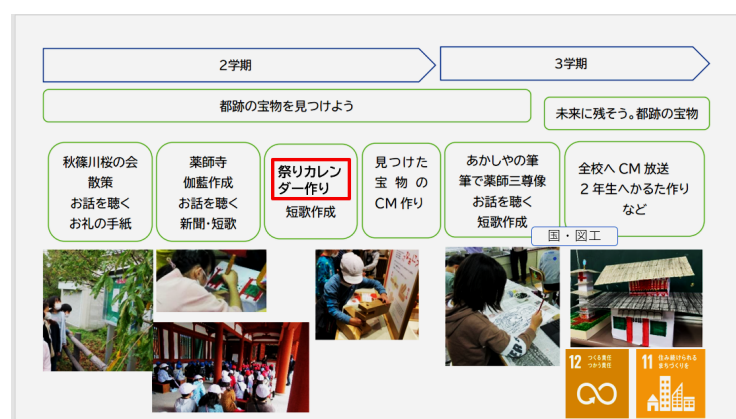
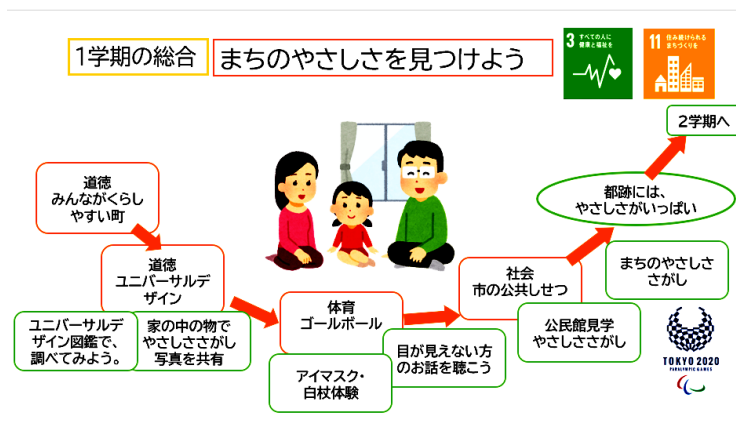
- (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようになる。
- (2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
- (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

したがって、児童が自ら探究的な見方・考え方を働かせ、課題を解決し、自己の生き方を考えて行くための資質・能力を育成することを第一義として単元を計画する。

4. 単元について

本単元は、学校教育目標の「自らの学びを深め、他者と協働して未来を切り拓き、たくましく生き抜く子どもの育成」のため、3年生の総合的な学習の時間40時間をかけて行う「都跡のたからを伝えよう」の中の3時間の単元である。(下図、赤枠部分)

1学期には、SDGs3番と11番を意識し、「町のやさしさを見つけよう」の学習を行う。2学期、3学期はSDGs12番と11番を意識し、「都跡のたからをみつめよう」「未来に残そう。都跡の宝物」の学習を行う。これらの学習は、国語、道徳、社会、算数などと教科横断的に学習を進める。



5. 地域・学校の様子

都跡校区は、世界遺産に指定された『古都奈良の文化財』のうち、平城宮跡、薬師寺、唐招提寺を有する、極めて歴史的由緒のある地域に立地しており、住宅地と農作地が混在している。文化財や景観の保全への意識も高く、北部では平城宮跡保存運動、南部では景観を守るためのマンション反対運動などが有名である。

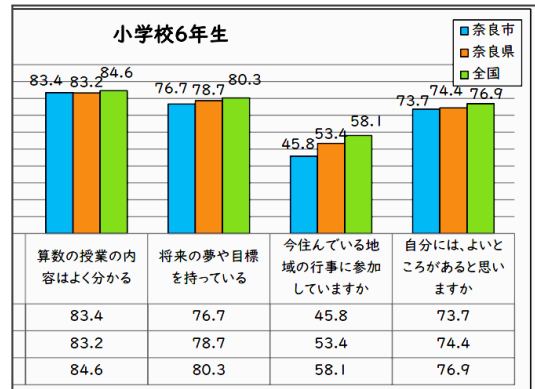
都跡小学校は、児童数485名の中規模校で、創立112周年を迎える歴史ある学校である。3世代にわたって都跡小学校に通っている家庭も多く、地域とのつながりが強い学校である。世界遺産学習に当初から取り組み、ユネスコスクールとして、ESDに取り組んできた。

6. 児童観

コロナ禍で地域行事が減り、祭りやイベントなどの経験を持たず、地域のつながりを感じられない児童が多くなってきた。また、縦割りや保幼小連携、小中合同の行事もできなくなったことで、子どもたち同士の異年齢での交流も減ってしまっている。この状況は、子どもたちが文化的な誇りや憧れ、つながりを非常に持ちにくい状況である。

奈良市においても、令和3年度学力学習状況調査の質問紙において、「今住んでいる地域の行事に参加していますか」という項目は、全国平均に比べ小学生で13%、中学生で11%低く、大きな課題であると言える。

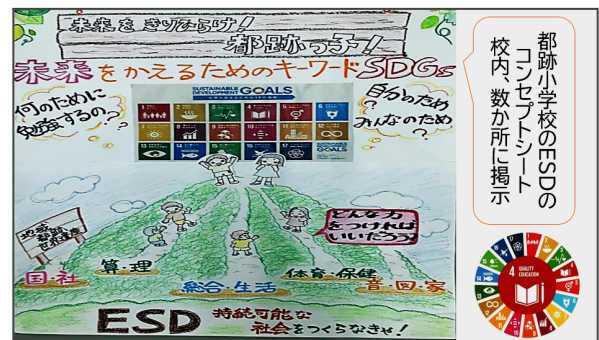
学級の児童も平城宮跡のお祭りには行ったことがあるが、地元のお祭りに参加したことがある児童が少なく、うすすらとコロナ前の記憶が残っている程度で児童と地域のかかわりが減っている。また、問題を抱えた家庭ほど地域との関わりが少なく顔見知りも少ない。「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という観点から、地域の中で他者と協働しながらたくましく生き抜く子どもを育成したいと考えた。



7. 都跡小学校のESD

都跡小学校は、ユネスコスクールに加盟し、2008年から学校目標の達成のため、9年間を見通したESDに取り組んできた。

令和2年2月の世界遺産サミットの際に、このようなコンセプトシートをつくった。



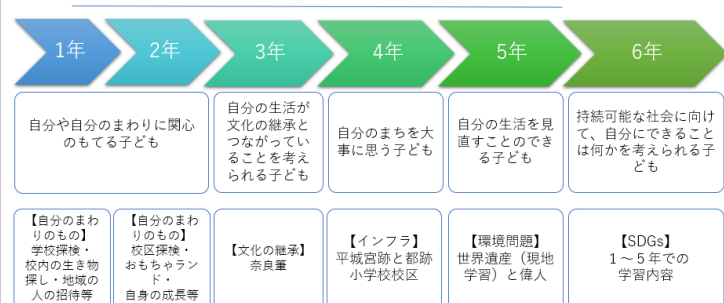
このコンセプトシートは、学校教育目標の「自らの

学びを深め、他者と協働して未来を切り拓き たくましく生き抜く子どもの育成」を目指して、ユネスコスクールとしてESDを、「自らの未来を切り拓き、心豊かな共生社会の実現と持続可能な社会の実現を

目指す実践的な学び」と捉え、総合だけではなく、国算社理・音楽図工など様々な教科を通して、学びと社会をつなぐことを大切に、児童に育成したい資質・能力を明確にして、学びを進めていくことを示している。

コンセプトシートを具体化したものが、都跡小学校の総合・生活科の

総合・生活科の系統表



系統表である。6年間のESDの学びを通して、学校教育目標に示された子どもの育成を目指している。

第3学年では「自分の生活と文化の継承がつながっていることを考えられる子ども」の育成を目指す。

8. 地域の祭りの種類と、本単元の「人とつながる祭りの学習」の意義

都跡小学校の校区には、3年前まで以下のように分類できる様々な祭りが存在していた。

1) 神社・寺の祭り 氏子、檀家のための祭り

閉鎖的な祭り。伝統を守り、地域の文化・誇りを守る。

2) 神社・寺の祭り 観光客や小学生にも開かれた祭り

文化や独自性を感じ、つながりを感じる。

3) 地域の祭り 地域の住民のための祭り

自治連合会を中心に。地域振興。住民のつながり・地域文化の継承

4) 学校と地域の祭り 子供たちのための祭り

学校は場を提供する。子どもたちが楽しむ。各種団体は活動資金を得る。様々な成人モデルや身近なあこがれを感じることができる。

コロナ禍でほとんどの祭りが中止され、①②③④ともに児童には存在感が薄れ、どの児童にとっても地域社会の人のつながりと広がりが見えにくい状況にあると考えられる。祭りは児童にとって、人と人とのつながりを感じ、地域の様々な人と出会い、人との関わりを通して地域の文化を知り、自分も地域の文化の継承者であることを実感する機会である。

9. 教材観

- 以上のことから、地域と子どもをつなぐ祭りの学習「都跡の祭りカレンダーをつくろう」では、コロナ禍でつながりが薄れた子どもたちや地域の現状を踏まえ、令和3年度の総合的な学習の時間のカリキュラムに、祭りの学習を入れる。そのことによって、地域の人と人とのつながり・文化を知り、自分も地域の文化の継承者であると考えられるこどもの育成をめざす。
- Googleフォームやスプレッドシート、スライドは、単元内で初めて使うのではなく、教科等の時間で普段から使っている。
- 今のGoogleの環境ではマイマップの作成ができないが、Googleのデータを将来Mapと連動させることができるようになれば、Map上に作成したデータを配置し、2年生の町探検の時に3年生が作ったデータを使って祭りのことを学習できるようになり、学校としての実践知の集積にもつなげられる。

10. 学習活動の概要「都跡の祭りカレンダーをつくろう」全3時間

a. 評価規準

ア. 知識・技能	イ. 思考・判断・表現	ウ. 主体的に学習に取り組む態度
①地域に伝わる祭りを調べ、地域の人々の思いをインタビューしている。 ②地域の文化、地域の人、自分とのつながりを理解している。	①自分の生活と文化の継承とのつながりを考え、表現している。 ②課題解決に向けて、情報を収集・分析、表現している。	活動を通して、地域の伝統文化に関心を持ち、意欲的に考えようとしている。

b. 指導計画

時	学習活動	評価規準
1	事前に行ったGoogleフォームでの祭りアンケートの結果のスプレッドシートから、自分の担当部分をスライドにまとめる。	ア①、イ②ウ スライド・発言
2	ふれあい会館に行き、お年寄りからお祭りについて教えてもらい、教えてもらったことや考えたことをスライドに書き足す。	ア①、ウ スライド・発言
3	学級での交流会を行い、学んだことをポートフォリオにまとめる。	ア②、イ①、ウ ポートフォリオ

後日、出来上がった祭りカレンダーとポートフォリオの感想をまとめたものを、ふれあい会館に持って行ったり、学級通信に載せ保護者に向けて伝えたり、教室前廊下に掲示したりする。本単元の学習から、祭りへの参加へと行動化を促すためである。

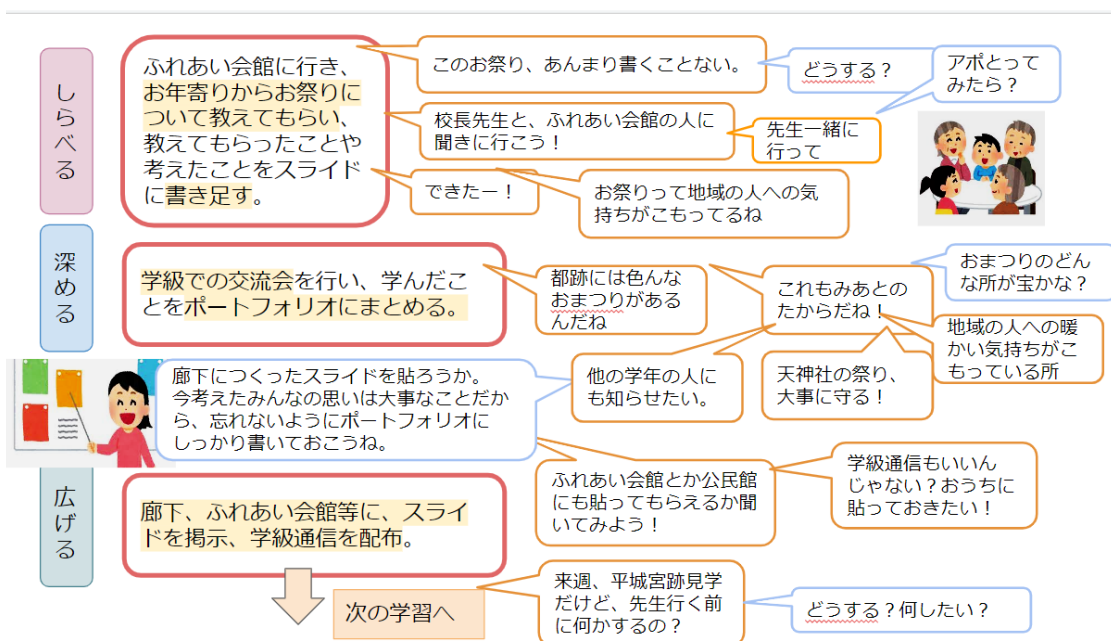
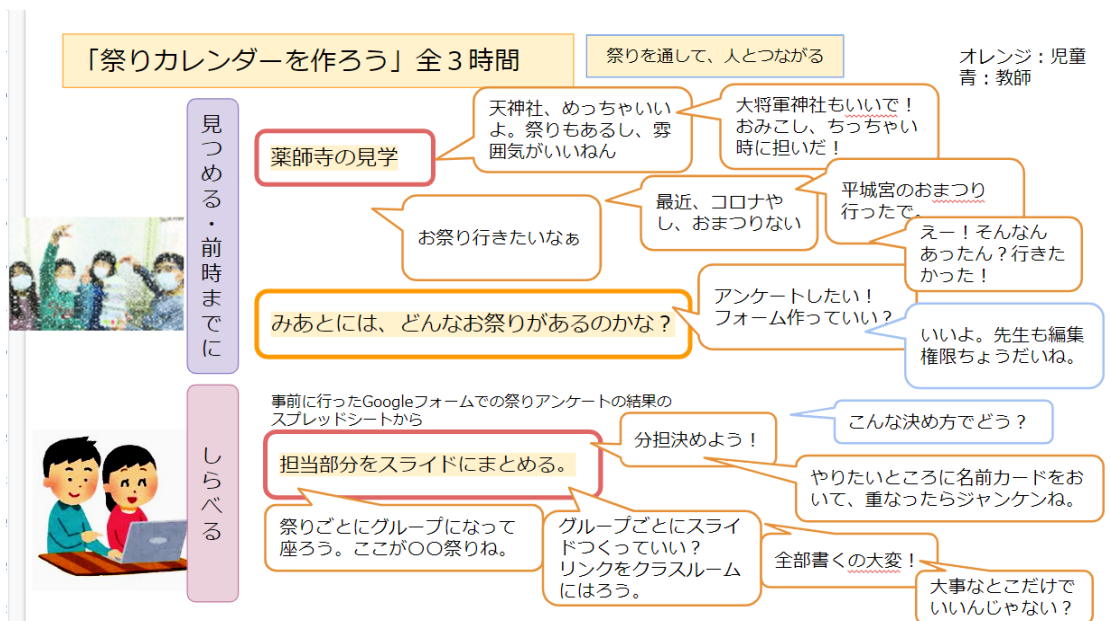
11. ESD・SDGsの視点

本単元を含む第3学年の総合的な学習の時間は、SDGsの目標11「持続可能なまちと地域社会」を基軸に、1学期は目標3「すべての人に健康と福祉を」、2学期3学期は目標12「つくる責任・つかう責任」という視点で都跡の町の宝ものを探し、都跡の人々が大切にしてきた思いや、自分の生活が文化の継承につながっていることを考える。都跡の人々が町を大切にしてきた思いは、福祉・祭り・世界遺産など違う形となって表出している。それぞれのものや場所について丁寧に探究していく中で、それらをつくり守ってきた人々の思いを知り、思いが詰まった都跡の文化の継承が自分たちの生活とつながっていること、今後も継承するにはどうすればいいのかを考えたい。したがって本単元で育成する持続可能な社会づくりの構成概念は、多様性、相互性、連携性、責任性である。

12. 単元構想図

第3学年総合的な学習の時間「お祭りカレンダーを作ろう」3時間(全40時間)

3年目標:「自分の生活と文化の継承がつながっていることを考えられる子ども」の育成

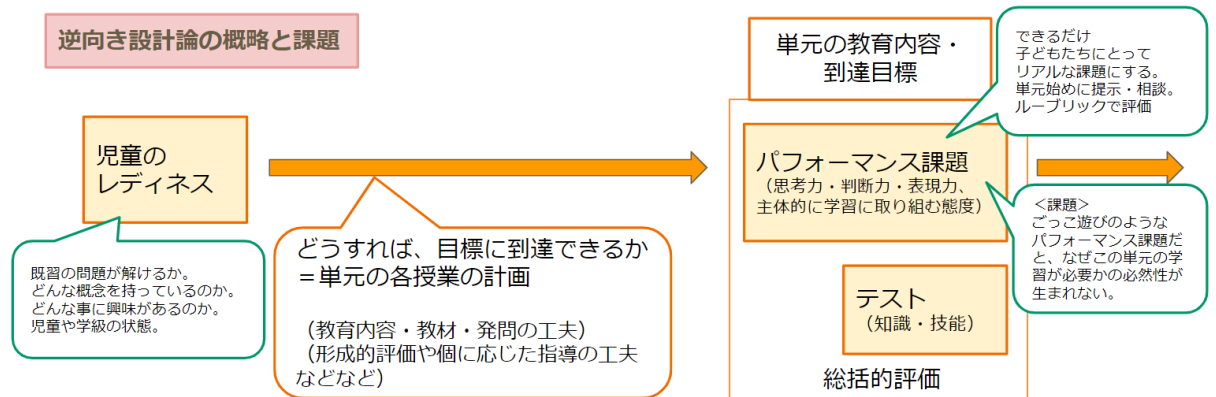


13. 各教科との関わり(教科横断の視点)

本単元は総合的な学習の時間としては3時間という配当の短い単元である。しかしこの単元には、社会、算数、国語の教科の学習が並走し、教科を横断した大きな単元となるように設計したい。

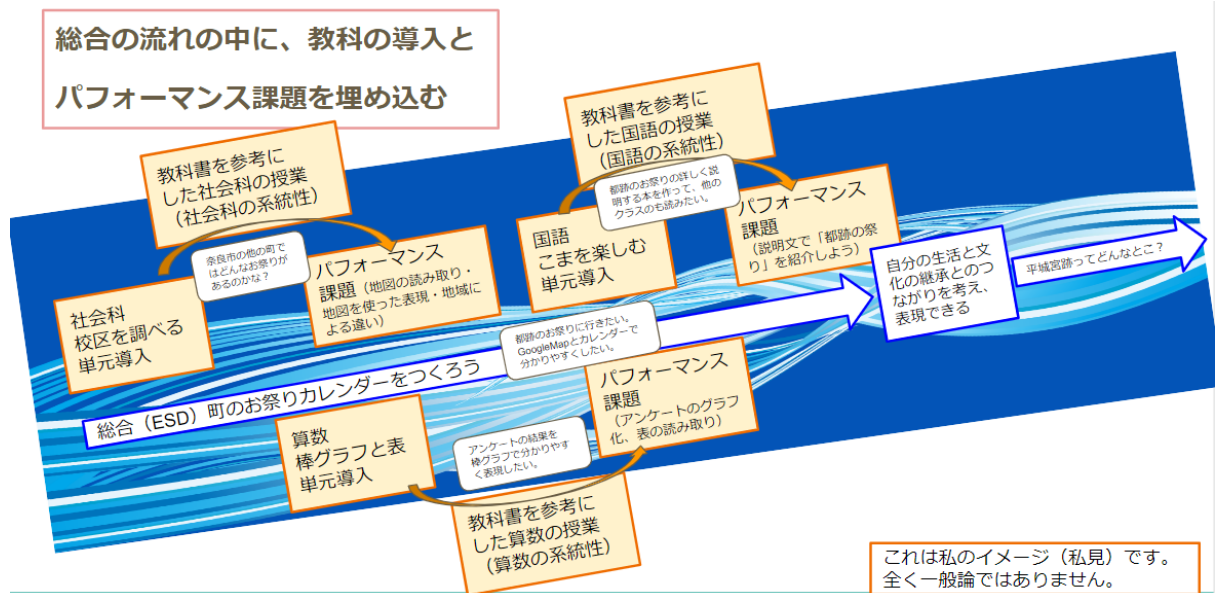
教科の単元を計画する際、パフォーマンス課題が真正な課題とならない場合が多い。

(逆向き設計論による単元設計のイメージは下图)



そこで本単元構想では、「お祭りカレンダーをつくろう」という総合的な学習の時間の流れの中に、教科の導入とパフォーマンス課題を埋め込むことで、教科を含めた教科横断の大きな学習の流れにしたいと考えた。

(イメージは下の図。本単元が5月実施の場合。)



このように学習を進めるメリットは、

1. 子どもたちに学ぶ必然性が生まれる。
2. 生活から学習を始めて、生活に戻ってさらに発展できる。
3. 教科固有性や系統性も担保できる。
4. 児童の学びの文脈に沿ったパフォーマンス課題になる。
5. ESDを基盤とし、地域教材を軸とした学習の流れの中に教科の学習を埋め込むため、地域の方と協働した社会に開かれた教育課程になっていく。

ことである。

14. 学年での協働的単元づくり

一方、デメリットとしては、パフォーマンス課題を埋め込むためには、子どもたちや教師のレディネス・教科の学習の進度にあわせた計画を作成する必要があり、一般的な年間指導計画を作成し遂行するカリキュラム・マネジメントでは破綻してしまうことである。

したがって計画は、2週間程度の単元ごとに直前に計画する。学習の進度、児童や教師のレディネスを確認し、子ども達や教師がやってみたい事・アイデアを入れながら計画する。何度もこのサイクルを繰り返すことで、少しずつ単元計画のイメージやパフォーマンス課題を埋め込むイメージを共有しながら、一番ベストな方法や単元設計を探ることができるようになり、学年担当の教員全員の単元計画力の向上や、ルーブリックの作成にかかる時間も短縮できるようになると考える。